

いてふの実

宮沢賢治

青空文庫

そのらのでつぺんなんか冷たくて冷たくてまるでカチカチの灼やきをかけた鋼はがねです。

そして星が一杯です。けれども東の空はもう優しい桔梗きぎやうの花びらのやうにあやしい底光りをはじめました。

その明け方の空の下、ひるの鳥でも行ゆかない高い所を鋭い霜のかけらが風に流されてサラサラサラ南の方へ飛ゆんで行きました。

実にその微かすかな音が丘の上の一本いてふの木に聞える位澄み切った明け方です。

いてふの実はみんな一度に目をさしました。そしてドキツと

したのです。今日こそはたしかに旅立ちの日でした。みんなも前からさう思つてゐましたし、昨日の夕方やつて来た二羽の鳥からすもさう云いひました。

「僕ぼくなんか落ちる途中で眼めがまはらないだらうか。」一つの実が云いひました。

「よく目をつぶつて行けばいゝさ。」も一つが答へました。

「さうだ。忘れてゐた。僕水筒に水をつめて置くんだった。」

「僕はね、水筒の外に薄荷はくかすゐ水を用意したよ。少しやらうか。旅へ出てあんまり心持ちの悪い時は一寸ちよつと飲むといゝつておつかさんが云つたぜ。」

「なぜおつかさんは僕へは呉くれないんだらう。」

「だから、僕あげるよ。お母さんつかを悪く思つちやすまないよ。」
さうです。この銀杏いっせふの木はお母さんかあでした。

今年は千人の黄金色きんの子供が生れたのです。

そして今日こそ子供らがみんな一緒に旅に発たつのです。お母さんはそれをあんまり悲しんで扇あふぎがた形の黄金の髪の毛を昨日までにみんな落してしまひました。

「ね、あたしどんな所ところへ行くのかしら。」一人のいてふの女の子が空を見あげて呟つぶやくやうに云ひました。

「あたしだつてわからないわ、どこへも行きたくないわね。」も一人が云ひました。

「あたしどんなめにあつてもいゝからお母さんつかの所ところに居たいわ。」

「だつていけないんですつて。風が毎日さう云つたわ。」

「いやだわね。」

「そしてあたしたちもみんなばらばらにわかれてしまふんでせう。
」

「えゝ、さうよ。もうあたしなんにもいらないわ。」

「あたしもよ。今までいろいろわが儘ままばつかし云つて許して下さ
いね。」

「あら、あたしこそ。あたしこそだわ。許して頂ちやうだい戴だい。」

東の空の桔梗の花びらはもういつかしぼんだやうに力なくなり、
朝の白光りがあらはれはじめました。星が一つづつ消えて行きま
す。

木の一番一番高い処ところに居た二人のいてふの男の子が云ひました。
「そら、もう明るくなつたぞ。嬉しいなあ。僕はきつと黄金色の
お星さまになるんだよ。」

「僕もなるよ。きつとこゝから落ちればすぐ北風が空へ連れてつ
て呉れるだらうね。」

「僕は北風ぢやないと思ふんだよ。北風は親切ぢやないんだよ。
僕はきつと鳥さんからすだらうと思ふね。」

「さうだ。きつと鳥さんだ。鳥さんは偉いんだよ。こゝから遠く
てまるで見えなくなるまで一息に飛んで行くんだからね。頼んだ
ら僕ら二人位きつと一遍に青ぞら迄まで連れて行つて呉れるぜ。」

「頼んで見ようか。早く来るといゝな。」

その少し下でもう二人が云ひました。

「僕は一番はじめに杏あんずの王様のお城をたづねるよ。そしてお姫様をさらって行ったばけ物を退治するんだ。そんなばけ物がきつとどこかにあるね。」

「うん。あるだらう。けれどもあぶないぢやないか。ばけ物は大きいんだよ。僕たちなんか鼻でふつと吹き飛ばされちまふよ。」

「僕ね、いゝもの持つてるんだよ。だから大丈夫さ。見せようか。そら、ね。」

「これお母つかさんの髪でこさへた網ぢやないの。」

「さうだよ。お母つかさんが下すつたんだよ。何か恐ろしいことのあるときは此この中にかくれるんだって。僕ね、この網をふところ

に入れてばけ物に行つてね。もしもし。今日は、僕を呑め^のますか
呑めないでせう。とかう云ふんだよ。ばけ物は怒つてすぐ呑むだ
らう。僕はその時ばけ物の胃袋の中でこの網を出してね、すつか
り被^{かぶ}つちまふんだ。それからおなか中をめつちやめちやにこはし
ちまふんだよ。そら、ばけ物はチブスになつて死ぬだらう。そこ
で僕は出て来て杏のお姫様を連れてお城に帰るんだ。そしてお姫
様を貰^{もら}ふんだよ。」

「本当にいゝね、そんならその時僕はお客様になつて行つてもいゝ
だらう。」

「いゝともさ。僕、国を半分わけてあげるよ。それからお母^{つか}さん
へは毎日お菓子やなんか沢山あげるんだ。」

星がすっかり消えました。東のそらは白く燃えてゐるやうです。木が俄にはかにざわざわしました。もう出発に間もないのです。

「僕、靴くつが小さいや。面倒くさい。はだしで行かう。」

「そんなら僕のと替へよう。僕のは少し大きいんだよ。」

「替へよう。あ、丁度いゝぜ。ありがたう。」

「わたし困つてしまふわ、おつかさんに貰つた新しい外ぐわいたう套たうが見えないんですもの。」

「早くおさがしなさいよ。どの枝に置いたの。」

「忘れてしまったわ。」

「困つたわね。これから非常に寒いでせう。どうしても見附けないといけなくつてよ。」

「そら、ね。いゝぱんだらう。ほし葡萄ぶどうが一寸顔ちよつとを出してるだらう。早くかばんへ入れ給たまへ。もうお日さまがお出ましになるよ。」

「ありがたう。ぢや貰もらふよ。ありがたう。一緒に行かうね。」
「困ったわ、わたし、どうしてもないわ。ほんたうにわたしどうしませう。」

「わたしと二人で行きませうよ。わたしのを時々貸してあげるわ。凍えたら一緒に死にませうよ。」

東の空が白く燃え、ユラリユラリと揺れはじめました。おつかさんの木はまるで死んだやうになってじつと立ってゐます。

突然光の束が黄金きんの矢のやうに一度に飛んで来ました。子供ら

はまるで飛びあがる位輝やきました。

北から氷のやうに冷たい透きとほった風がゴーツと吹いて来ました。

「さよなら、おつかさん。」 「さよなら、おつかさん。」 子供らはみんな一度に雨のやうに枝から飛び下りました。

北風が笑つて、

「今年もこれでまづさよならさよならつて云ふわけだ。」 と云ひながらつめたいガラスのマントをひらめかして向ふへ行つてしまひました。

お日様は燃える宝石のやうに東の空にかかり、あらんかぎりのかゞやきを悲しむ母親の木と旅に出た子供らとに投げておやりな

さいました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第八卷」筑摩書房

1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行

入力：林 幸雄

校正：久保格

2002年11月10日作成

2008年10月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/ で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

いてふの実

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>